

# 語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語 (77) (A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

日常的に自分にとり未知事項を追求しているのと、自分の既知事項を扱っているのとでは短期間にも雲泥の差が出る。常に未知事項を追い求めたいものである。その点では各種の研究所の研究者や学校機関では高等教育機関の大学の研究者などはみずからの既知事項には関心はもたず未知事項ばかりを追っているが、世の中は何かともう半世紀前とは違っている。筆者の学部学生時代を振り返ると英語学講義は Chomsky の Chom-[tʃəm] ぐらいであった。その後の米国での大学での講義では Chomsky 理論はもう常識であった。ただし、一方でやはり F. de Saussure 風の structural linguistics (構造主義言語学) はやはり生きていた。

今回の Trump 氏の意味劇場(semantic theater)では(1)と(2)で新型コロナウイルスに関わるもの、(3)では滑稽さも感じられる text 文例を觀てみる。速読反復読みで単一文ではない今日的な text 分析の手法を取り込んだ構造主義言語学的パターン認知の修練(textual pattern recognition practice)を積み重ねたい。text 文ではない単一文ばかりの散発的な取り組みでは英文の論理的流れは把握できなく、実際には真の英語力とまらない。Basic にしても同様だろう。またも道具の stopwatch で読みの速度を計測もするのである。

(1) Just landed. India was great, trip very successful. Heading to the White House. Meetings and calls scheduled today. @CDCgov, @SecAzar and all doing a great job with respect to Coronavirus ! Briefing this afternoon. 😊 (February 26, 2020)

▲Trump 氏が 1 期目大統領就任後初めてのインド訪問を終え「飛行機が着陸した、インドは素晴らしかった、大成功だ、これから White House に向かう、今日はいくつか会議と電話もある、疾病予防管理センター(Centers for Disease Control and Prevention : CDC)、アザー(Azar)保健福祉省長官、また他全員がコロナウイルス(coronavirus)の件では頑張ってくれている！午後にはブリーフィングがある」と言っている。

この tweet 文には要注目である。India was great, trip very successful.は India was great. (And) The trip was very successful.と読み取りたい。短い文の羅列であるが「英語で考える」とはこういうことで、彼らは日常的に次々とこのような 3 ± α 語で綴るメモ書き式の略式 text 文で物事を考えていることを示す好例である。メモ書き式の text 文と言ったが、きわめて卑近な例では英語にいわゆる接続詞の and と but がないと大変不便となる。元来が and は in と同系語で but は out と同系語であるが、この接続詞(conjunctions / connectives)を Basic 世界語彙では 2 語で (j ) words と言う。括弧内に入る j で始まる 1 語は？接続詞は語と語を文字どおり接続する語である。Ogden は joining words とした。joining が正解である。何か文を綴れば and, but はすぐ現れる。上の Trump 氏の外遊を現地インドの日刊英字紙 *The Hindustan Times* が同日、次のように 2 通りで報道したので、それを下に示してみる。

## President Trump returns to US after 'very successful' India trip

The president and his team returned home after a whirlwind 36-hour trip to India, which was the first by Trump after his election. The two sides announced their intention to upgrade the global strategic partnership and the sale of USD 3 billion worth of defense equipment to India.

.....  
President Donald Trump returned home Wednesday morning after, he wrote on Twitter, a “great” and “very successful trip” to India to confront growing concerns about coronavirus outbreak engulfing the United States. He has called for urgent briefings and will hold a news conference later. (*The Hindustan Times*, Feb. 26, 2020)

このような記事の style (文体) と上のメモ書き式の tweet 文例をじっくり対照して考えておくことには意義がある。ここにも and をいくつか見る。本連載(18)の(2)で 1 例だけ扱っておいた Chomsky 風の transformational grammar (変形文法) での **kernel sentence** (核文) と **full sentence** (全文) の相互関係とも関わる文例である。最初の記事の下線部 a whirlwind 36-hour trip の「旋風・つむじ風の中での 36 時間の旅」という言い方は興味深い。2 つ目の記事で 3 行目の hold は have に代わるが英語では頻出する。

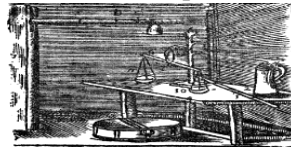
上の(1)の tweet 文での太線語 trip は原義が「足を軽く踏んで歩くこと」である。したがって「つまず」の意味でもよく用いられる。Basic 世界語彙 **trade**、プラス α Basic 世界語彙 **trap**、非世界語彙 traffic, tramp (踏みつける・とぼとぼ歩く) などと同系である〔拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(89)参照〕。

次の太線語 scheduled < schedule は本連載(66)の(1)などですでに扱ったのでここでは確認となるが、「切ること」が原義で Basic 世界語彙 **scissors**, **screw**, **skirt**, **shirt**, **short**, **sharp**, **ship** などと同系であるし、プラス α Basic 世界語彙では **shore** (海岸) などとも同系である。ship は元は木を切って (彫って) 造ったもの〔他の多くの同系語は同上拙著、第二部、例(6), (141)参照〕。これらの語は morphoglossemic (形態言素的) / morphophonemic (形態音素的) な etymon が /SKER/ (/SCER/) とされているが、schedule [skédʒu:l] / [ʃédʒu:l] の音感も感知しておくといふ。「スケジュール」とは「切り取ったもの」ということ。

*The Hindustan Times* 中の太線語 strategic (戦略的な) の同系語を Basic 世界語彙に求めれば **stretch**, **straight**, **street** がある。印欧祖語の PIE etymon 音素形 /STER/ (/STRA/) が復元されているが「広げること」が原義である。音素(phoneme)の概念は冒頭で触れた構造主義である〔同上拙著、第二部、例(97)参照〕。

太線語 **equipment** は実は上の「切ること」を原義とし広義には「道具」となる。[p], [k], [f], [s]音をもつ一連の Basic 語とも根元ではつながっていて、元は Basic 世界語彙の **ship** に載せる(装備する)という意味に由来する。**skiff** (小船) も同系語で音感からも共通性は感知される〔感知といえど [k], [s]音などは加齢とともに明確に聴取し分けができなくなるとされてもいる〕。「道具」を意味する語に **instrument**, **apparatus**, **implement**, **tool**, **utensil**, **device**, **means**, etc. 多々あり **instrument** と **apparatus** が Basic 世界語彙で他は非世界語彙であるが、それぞれその **synonyms** (類義語) の意味の違いを本来の原義から感知しておくことが英語がよく分かることにつながる〔**synonym** の研究には P. M. Roget の語の総合目録たる **thesaurus** は欠かせない〕。**means** は人間とその労働作業(手作業)の間に介在するもので、これが道具・手段の意味となる。漢字の手段での「手」が示すように作業も人体の部位としての **hand** が基本にある。

本連載(67)で重さを計り**均衡状態(balance)**を見る**天秤(scale)**、また(72)で諸々のこの世界に存在する道具に関し注目したが天秤は意味の問題の**計量・重量**を計る道具(**instrument**)として数学的方程式での左辺と右辺のつり合わせ・均衡をイコール記号(=) (等しいもの) とすることとも結びつく。本連載で注目している J. A. Comenius (1658) *Orbis Pictus* 『世界図絵』は特別に天秤等、この世界で物の測定道具の存在を図絵で多く示しとした。EP 本での図絵と語釈もしくりで、この Comenius による 150 種の図絵をヒントとしたとやはり推測できる〔EP 本での天秤の図絵は II, p.81, III, p.165, p.204, p.212 [本連載(73)] 参照〕。



— J. A. Comenius, *Orbis Pictus* 『世界図絵』 (1658) [127 番目の天秤の図絵]

図絵といえど日本の日常生活を描く漫画『サザエさん』の英文版(*The Wonderful World of Sazae-san*)もあるが、これの 4 コマ英文漫画は世の中と人間(日本人)の心の中の在り方を垣間見る上で何かと参考となる。筆者は東京・世田谷区桜新町の通称「サザエさん通り」が好きで、よく散策した場所である。何の変哲もない庶民的な界限ではあるが通りには長谷川町子美術館もありよく訪れたが、このサザエさん漫画発祥の場・舞台は A. Korzybski の「地(**ground**)」と「図(**figure**)」の見方と絡めた言語意味論的な思索上でも気になる地(**ground**)の 1 つである〔本連載(70), (71)参照〕。

次に(2)の tweet を見てみる。2019 年末から全世界に蔓延した上の(1)での新型コロナウイルス〔WHO はこれを COVID -19 と名付けた〕はアメリカにも感染が大きく広がったが、これに関し Trump 氏がつぶやいた tweet 内容を見ておくこととしよう。stopwatch で計測する読みの秒速は反復読みで必ず速くなる。

(2) It is very important that we totally protect our Asian American community in the United States, and all around the world. They are amazing people, and the spreading of the Virus is NOT their fault in any way, shape, or form. They are working closely with us to get rid of it. WE WILL PREVAIL TOGETHER! 😊 (March 24, 2020)

▲当初は米中貿易戦争を改めて思わせる the Chinese Virus (中国ウイルス) だと何度も言っていた Trump 氏であったが、ここでは態度を軟化させた内容のもの。「米国と世界中のアジア系米国人社会を全面的に保護する必要がある、彼らは素晴らしい民族でウイルスが蔓延したのは彼らのせいでは全くない、彼らは目下これの除去でわれわれと一体である、共に戦いの勝利を目ざすのだ!」と言っている。事の進展で態度を変えた Trump 氏であるが実はこの後、また中国に対する態度を硬化させ再び the Chinese Virus とも言った。

文中で下線とした「世界中」の all around the world を all over the world ばかりでなくもっと使いたい。over は静的で around (round) や across は動的な感じがする。

太線語 **get rid of** (～を取り除く) の **rid** は名詞ではなく「取り除かれた」の意味の完了分詞形(現在形は同じ **rid**)で形容詞である。Basic で言うなら **get clear of** でよい。**rid** は元来が「原野を開墾すること」が原義であったようであるが、Basic 世界語彙に同系語を求めれば **rod** (こん棒・さお) がある。

太線語 **prevail** には「強いこと」の語感がある。**available** (利用できる)、**valid** (有効な)、**invalid** { (= not) + **valid** (= strong) } (病人)、**valiant** (勇敢な)、**valor** (勇気) などと同系であるが、上記 Comenius の世界の在り方を 150 種の図絵で示した世界図絵をもじれば本連載(71)で言ったが「世界語彙」たる 850 語中の Basic 世界語彙 **value** と同系。**WE WILL PREVAIL TOGETHER!** の **We will prevail**. (われわれは勝利する) は戦争などの前に言う慣用的言い方で頻出する。もちろん **prevail** の代わりに **win** とも言う。

この tweet 文での最初の文で二重下線とした **It ... that** 形式による **It is important that ...** はいわゆる英語⇒日本語の同時通訳では「重要なこととしまして」などの訳法で処理するのが手早いこととなるが、これは典型的には前回触れた疑問詞としての **what** で代表される **pseudo-cleft sentence** (疑似分裂文) ではないし、**It ... that** の **cleft sentence** (分裂文) でもない。この例のような **It is important that ...** は **that** 以下が長くなるのでまずは振り出し語としてとりあえず形式的に **It** とする dummy 'it' であるが、一種の儀式性をもつので筆者はこれを **ritual 'it'** と呼んでもいる。**It** の中身が具体的に後ろの **that** 以下で示され、ここではそれが「米国のみならず世界中のアジア系米国人社会の保護政策」であることを示すこととなる。

一方、**It ... that** で文を分裂し意味を焦点化(focusing)するいわゆる **cleft sentence** (分裂文) では、振り出し語として **It** という限り情報提供上やはりそれなりに何らかの既知情報(given information)が踏まえられる **anaphora** (前方照応) であると言える。**cleft sentence** では **It** で振り出されても読み手にはそれなり



に織り込み済みの指示内容として暗示される。前の情報ともそれなりにつながり coherence (結束性) が保たれるのが cleft sentence であるし、また保たれていなければ discourse としては成立しない文となる。

EP 本 III では cleft sentence をいくつも見るが、これに照準しての研究も意義がある。たとえば **It was not until many centuries later that people put this knowledge of geometry to wide use.** [p.180] (何世紀も後になってから人はこの幾何学の知識を広く応用するようになった) などがある。ここでは later (さらにあと) と this (この) からもし唆されるが、文頭振り出し語 It が上記それなりに指示項の役割を担う。

また EP 本 III での pseudo-cleft sentence (疑似分裂文) の例としては、中国の思想家・孔子の『論語』(the Analects of Confucius)の抄録で門下生が書いたとされる *The Chung Yung* の中の文言が英語にされた **What makes us is named our nature. What directs our nature is named the Way. What makes the Way possible is education.** [p.220] (人を造るものが本性、本性を導くものが道、道を可能ならしめるものが教育なり) などがある。ここでは太字体とした語に焦点が向けられることになる。

英文は基本的に文頭振り出し語が主題・テーマ付けとなる [例: ①平叙文: **John is ...** ② Yes-No 疑問文: **Is John ... / Does John ...** ③ Wh-疑問文: **What is John ...** ④感嘆文: **What... / How ...**]。EP 本 I での yes, no, not, what は名詞の answer, question と共に p.30 での初出で、最初に提示される EP 本での疑問文は **What?** による。Yes-No 疑問文は後回しとする。what は Wh-疑問詞で特別に重要なものと言える。

疑問文には **echo-question** (問い返し疑問文) もあり、対話でたとえば I went there. — You went **where**? や I saw him then. — You saw him **when**? などの言い方がある。また、I am “here”. — **Where** is “here”? のようなものもある (EP III, p.1)。本会での EP 本に基づく意味劇場での実践・実演でも要注目点である。

実は interrogatives (疑問詞) はすべて **‘what’** の意味をもっていると言える。why = for **what** reason(s); which = **what** one; who = **what** person(s); where = in or to **what** place(s); when = at **what** time; how = in **what** way(s) のようになるが、たとえば安井稔氏は『構造言語学の輪郭』で **What** are you running for? と **What** are you looking for? の違いを例示したが、前者は「目的」で後者は「選択」の意味となる。

本連載(68), (75-sup)などで触れたソクラテス問答法(Socratic questioning / Socratic debate)では what の中身が徹底的に追究され真か偽か? 真らしく見える詭弁(sophism)か? が彼の問答法(産婆法)で暴露されていた。彼の問答法は人間が善く生きる(living well)ために必要な「**不知の自覚**」(**awareness of ignorance**)を生み出す言語術となった。これは語の定義(definition)の問題とも関わる。ポイントである。

なお、文中での下線部 are ... -ing のいわゆる「進行形」のことは Basic 世界語では the form of (p ) と言うが、括弧内に入る p で始まる 1 語は? 特に難しくはないが process と言う点は重要である。

(3) The ramp that I descended after my West Point Commencement speech was very long & steep, had no handrail and, most importantly, was very slippery. The last thing I was going to do is “fall” for the Fake News to have fun with. Final ten feet I ran down to level ground. Momentum! 😊  
(June 13, 2020)

▲Trump 大統領は 1 期目在任中の 2020 年 6 月に New York の陸軍士官学校(West Point Military Academy)での卒業式で演説を行った。演説後に演壇を下りる ramp (スロープ) で歩き方がよろめきながらのもので、lame duck (不具のアヒル) だとしてメディアが問題とした。迫っていた大統領選 2 期目へ向け彼には健康上の問題があるのか? と疑ったのである。これを受け彼が同日中に Twitter に投稿したのがこの文であった。

「West Point の卒業式(commencement)の演説のあと下りたスロープ(ramp)は長く(long)、急傾斜(steep)で、手すりもなかった(no handrail)、さらにすべりやすくもあった(slippery)、“転ぶこと”(fall)で偽メディアに笑われるなんてことはないぞ、最後の 3 メートルは地面まで走り下りてやった(Final ten feet I ran down to level ground.)、弾み(momentum)をつけたのだ!」という内容。

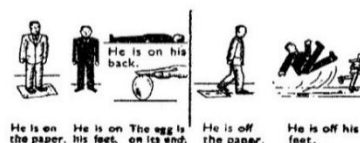
Tump 氏らしい物の言い方である。人間は足腰から弱ることはよく知られるが、この時のテレビ映像からは彼の足腰の筋肉など異常は何も感じさせなかった。Basic 世界語で言えば It seemed that his muscles and nerves were working together to keep him on his feet, and that he was in good form.であった。これとよく似た内容で Richards-Gibson が EP 本 III での語釈で示した人の身体の動きに関わる重要な Basic 世界語彙 muscle (筋肉)、nerve (神経)、impulse (衝動、行動上の目的・動機) とともに用いた次の図絵①、また to keep him on his feet という語法とも関連し C. K. Ogden が *Basic Step by Step* (1935)で提示した図絵・文例②を示しておく。この②の図絵は「転ぶこと」の意味をよく示している [cf. 漢字の「転」]。

①



What is this picture of? This is a picture of a man uncertainly coming down the steps.

②



What is this picture of? This is a picture of a man who is off his feet.

① Richards-Gibson, EP III, p.215 (cf. Basic 世界語彙: muscle, nerve, impulse). cf. EP II, pp.129-131

② C. K. Ogden, *Basic Step by Step* (1935), STEP 1, N1-1

図絵は Richards-Gibson の EP 本でのイラスト的で naive とも言えるものに比べ、②のような Ogden の著作での図絵は数は少ないが記号論(semiotics)・意味論(semantic)的に含蓄のあるものが多く示される。

さらに彼が演説中に水を飲むとき手が震えていて(shaking)、コップを両手で支えていたしぐさ<sup>しぐさ</sup>が変だとしてテレビやネット上の動画で注目された。ただ、彼は飲み物はよく両手を使う。ネット上の動画で彼のしぐさを何度も観てみたが特に妙でもなかったし、その後の彼の行動を観察しても変わらず元気そうで特に健康上の問題はなさそうに思えた。大統領選での対抗馬 Biden 氏に比べれば Trump 氏のほうが体力・活力のあることを感じさせた。彼の運動覚(sense of motion)は正常という感じであった[sense of motion は EP 本なら II, pp.129-131 など参照、また人の「しぐさと意味」の問題に関しては本会 Year Book No.75 (2023)での拙論で E. Hemingway の文学作品 *Snows of Kilimanjaro* 「キリマンジャロの雪」を素材に扱った]。

五感での視覚(sense of seeing)ばかりでなく第六感(6th sense)の「運動覚(sense of motion)」への注目が本連載での趣旨の1つにあるが、これは移動事象(motion event)である。運動覚といえ、たとえば揺れる(shaking)電車の中で立っていて転ばないのはなぜか？数学的には本連載(62)で触れた三角形の3つの頂点から対辺へ引いた中線が2:1の比で1点で交わる「重心」と関わる理屈となる。この重心を保たないと転ぶ。これは英語入門期の年齢の学習者がもつ数学的知識から説明できる理由づけの1つとなるだろう。motion に関しては EP 本 II (pp.82-88)、III (pp.94-95, pp.104-106)でも Galileo や Newton 風の見方が示されるが、実は紀元前のアリストテレスによる motion 理論 (Aristotle's theory of motion) が知られてもいる。

なお、歩行(walk)で重心と関わる英語の waddle, stagger, stumble, etc.を区別しておきたい。この種の語には L. Talmy 風の motion と manner(様態)の conflation(融合)を見る。Talmy には優れた論文“Semantics and Syntax of Motion” (1975) があることには本連載(70)、前々回(75-sup)で触れた。また motion に関連し L. W. Lockhart, *Basic Picture Talks* (pp.70-80)は「波」を意味する Basic 世界語彙 wave (cf. shake)の本来の意味を示唆するが、英語入門期後に波動方程式  $y = \sin(x-t)$  [x: 位置, t: 時間] も学習はされる。

その後、Trump 氏は新型コロナウイルス流行でしばらく控えていた大統領選へ向けての集会(rally)開始のため各地へ出向いた。大会場でマスクなしの大胆さは彼らしかった。

文中の太線語 ramp はカタカナで「ランプ」と言うが、たとえば高速道路出入り口の一般的にやや傾斜した道のことも英語で ramp という。ramp には「傾斜面をじわじわとよじ登る」という語感があるが、「降りること」にもつながる。ともかく、ramp が「ゆっくり歩くところ」であることからすれば Trump 氏の歩き方は原義にそったもの？であったことになる。英語の形容詞に rampant (病気などが猛威をふるう、はびこった、植物などが生い茂る) という語があるが、これも同系語である。ramp の同系語を Basic 世界語彙に求めれば実は上記の trade がある。trade (交易)は「足を踏んで歩くこと」から来ている。非世界語彙では trip, tread, tramp (てくてく歩く)などが同系[同上拙著、第二部、例(89)参照]。

音感と語感から同系語とその原義(root sense)を見定めていくには「カルタ取り」が有効である旨はすでに示唆したが、Basic 世界語彙本体の 850 語をよりどころに非 Basic 語彙を見ていくのである。たとえば5語の非 Basic 語の原義を求めるには同系語の Basic 世界語彙5語との10枚のカードから5組にそろえるのである。上の例なら trip と trade のカードを1組とし「足を踏んで歩くこと」の原義を察知するのである。

また、航空機や船舶の乗り降りに用いる階段を「タラップ」というが英語でどう言うか？やはり ramp である。「タラップ」はどこから来たか？であるが、実は trap かららしいがこれはまるで用いられない。trap は元来は「(動物などが)踏むもの」の意味だったようで「わな」の意味ともなった。日本人には意外に難しい語 ramp であるが、これを Basic 世界語で簡素に言うなら「landing steps」でよい。

末尾の momentum (勢い・弾み)は実はプラスα Basic 世界語彙でありイタリック体の momentum としておくが、英語でよく用いられる。本連載(14)の(1)でも Basic 世界語彙 move, motion、プラスα Basic 世界語彙 automobile と同系として確認した[他の多くの momentum の同系語の例は同上拙著、第二部、例(109)参照]。automobile と autobus は語根部 auto-の観点からはもちろん同系ではある。

(3)で下線とした The last thing I was going to do is ... での the last の使い方には要注意[実はこの種の文も‘what’を用いない pseudo-cleft sentence (疑似分裂文)で、他にもいくつも例はある]。意味は「最もありそうにないことは ... である」である。関連し、John would be the last man to do so. = John is most unlikely to do so. (ジョンがそうすることはあり得ないだろう)などの the last の使い方にも慣れたい。

なお、Basic 世界語彙の unlikely のような「合成語」を (c ) word と Ogden は称したが、括弧内に入る c で始まる1語は？簡単である。彼は complex word とした。これでよい。Basic 本体 850 語は1語でも曖昧な状態では EP 本 I-III 実践も気づかれなくとも空回りすることにつながるので要留意である。

下線部 Final ten feet I ran down to level ground.での移動経路(Path)の描写法にも要注目。事の在り方を位置変化(transposition)の移動状況(motion situation)として見るわけである。本会で用いられる EP 本ではそれが I, pp.14-16 で帽子のテーブルからの離脱と、その着脱(on / off)による移動・位置変化(motional transposition)に関し初出となる[本連載(74)、前回(76)など参照]。また、服飾としてのこの帽子(hat)の位置変化に続き EP 本で特徴的に示すものが、家屋内に必ず見る道具(instruments)としてのガラスコップ(glass vessels)や椅子(seats)などでその移動と静止の状況、さらにまた道具の鍵(key)を用いた(with / by the use of)ドア(doors)の開閉(shut / open)とその移動・静止の位置変化である。冒頭で言ったが何かとみずからの既知事項(known facts)のみならず、未知事項(unknown facts)を追い求めたい。(2025.12)

